



Title	バイリンガルろう教育の20年
Author(s)	佐々木, 倫子
Citation	母語・継承語・バイリンガル教育（MHB）研究. 2024, 20周年記念特別号, p. 192-193
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/102035
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

≪ Column 14 ≫

バイリンガルろう教育の20年

キーワード：明晴学園、バイリンガルろう教育、バイリテラシー、Meisei Gakuen School for the Deaf、bilingual deaf education、bilitracy

20年間の歩み

MHB学会の前身のMHB研究会が誕生したのは2003年のことである。その年、耳が聞こえない・聞こえにくい子（以下、「ろう児」）の教育界には大きな事件があった。全国の2歳から17歳のろう児と保護者たち107人が日本弁護士連合会に対して人権救済申立を提出したのである。申立書には、ろう学校において日本手話による授業を行うこと、各ろう学校に日本手話話者を配置すること、そうでない教職員には日本手話研修を行うこと、等が書かれていた。あれから20年、ろう教育は変わったのだろうか。

人権救済申立から署名運動、日本弁護士連合会の意見書提出等を経て、学校法人明晴学園が2008年4月に誕生した。日本で唯一の、日本手話と（書記）日本語、ろう文化と聴文化を視野に置き、順調な教科学習、人格形成、認知発達を目指す、バイリンガルろう教育の実践校である。誕生から14年後の2022年3月までの時点で、卒業生の中の大学進学者は23人で、大学進学率は48.1%である。これは全国の聾学校高等部（以下、「聾」は原文表記）のここ数年の大学進学率20.9～22.5%よりもかなり高い。この数字に対して「私立学校の保護者は教育熱心だから」などの意見が出されることがあるが、私立だからこそ重複障害学級の設置がない中、特性を持った子どもも同じクラスにおり、公立聾学校にうまく適応できず心身ともに疲労した生徒の転入も年々増えている。さらに、明晴学園は中学部までなので「卒業後普通高校に進む生徒もいるから」との指摘もあるが、卒業生の中には聾学校高等部進学者も多く、むしろ聾学校高等部の大学進学率に貢献しているとも言える。いずれにしろ認知能力の基礎を作ったのは、明晴学園の幼稚部、小学部、中学部である。大学進学者数の実績は、日本手話で理解可能な授業が行われているか否かの一つのバロメーターと言えるのではないだろうか。

一方、2022年に起きた札幌聾学校における日本手話での教育の継続を求める訴訟では、そのために13本の意見書が寄せられた。日本、米国、カナダ、スウェーデンの研究者が一致して述べているのは、ろう児の第一言語である手話を用いたろう教育の重要性である。人工内耳が日進月歩の進歩を見せている現在でも、先天的、あるいは、音声言語獲得以前に失聴したろう児には自然手話が必要なことを研究結果が実証している。

変わらぬろう教育

ろう教育の専門性を向上させるための指導者用教材がある。全国聾学校長会の協力を得て聾教育の現場の知識と実践の最先端を結集し、大学教員の監修も得て制作されたDVDである。その中にベテランの女性教員が3歳ぐらいの男児に向き合っている教え方のモデル場面がある。教員は男児に教具を使ってみせたり、教具を手渡して真似をさせたり、男児をほめたりしている。教員の声は絶え間なく発せられ、ジェスチャーは大きい。静かに男児の様子を見守って男児の自発的行動を促す場面はない。男児はチラチ

ラと教員と教具を交互に見て、自分の受け身の行動が教員の思惑通りか否かを探っている。外界に対して好奇心旺盛なはずの3歳児が、自身の関心を伸ばすこともなく、目の前で口をパクパク動かしている相手の思惑探りをしているのだ。

一方、ここで小さな冊子『日々、手話、楽し。』を紹介したい。毎ページいっぱいにろう児たちの写真が広がる。右のp.11の3歳児を見てほしい。その顔は、先生をチラ見して思惑探りをしているものではなく、しっかり先生を見つめて自身の考えを伝えている。認知能力を育てるのに必要なコミュニケーションが成立しているのだ。

P.7の男児は泣きながらも、先生がなぜ自分を叱っているのかを読み取ろうとしている。ごく普通のもうすぐ4歳の男児と幼稚園の先生とのやりとりが、手話で成立している。ろう児たちは視覚言語の日本手話を自然習得し、日本手話によって自由闊達なやりとりを行い、世界を知る。

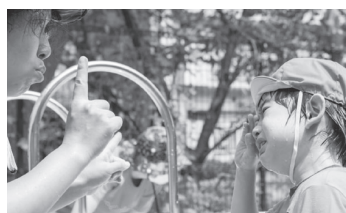
明晴学園は誕生以来16年間、手話科課程の説明書、日本手話と日本語の教科書・DVD、教師用指導書、そして、学校の日常を捉えたドキュメンタリー、新聞記事、学会発表・論文等の、多くの発信をしてきた。しかし、まだ上記のようなコミュニケーションの基本を説く冊子を作成して聾教育関係者や特別支援教育の行政に携わる人々にどう届けるかを模索する段階にあるのだ。聾教育界でのバイリンガルろう教育への理解は、この20年間ほとんど進んでいないのである。

では、他の聾学校に日本手話は存在しないのか。そのようなことはない。ろう者がいるところ、日本手話は常に存在する。しかし、ろう児同士が教室内で先生の目を盗んでやりとりしたり、休み時間に廊下でよもやま話をしたりする程度の使用では、高次思考力の「分析、評価、創造」はおろか、低次思考力の「暗記、理解、応用」にもなかなか達しない。聞こえる子どもが高3まで国語の授業を受け続けるように、ろう児がバイリテラシーの域に達するには、日本手話の教科としての授業が必要である。ろう・難聴児のためのバイリンガル教育を対象領域のひとつとし、北海道札幌聾学校における日本手話を用いた教育の継続を願う声明を速やかに発したMHB学会に、今後も力強い貢献を期待したい。

引用文献

学校法人明晴学園 (2023) 『日々、手話、楽し。』 vol.1 学校法人明晴学園

佐々木 倫子 (桜美林大学名誉教授)



「聞かない」ことは、相手の話を「聞かない」、失礼な行為です。
発音に気をつけて聞いてもらっても、どちらかの目は開けて話を聞きます。